

市芦救援会
 準備会通信
 1986年11月12日
 市芦救援会
 芦屋市剣谷九 市芦分会気付
 ☎〇七九七(三三)一三三三

市芦救援会第一回総会に向けて全力で取り組もう

三人の先生方の処分、強制配転から二ヶ月半経過しましたが、一〇月一〇日には市役所前で五〇〇人もの労働者、市民、卒業生、保護者の方々が結集し反弾任抗議集会が成功裡にともてました。そして二七日には三先生が芦屋市公平委員会に処分不服申し立てを行いました。

「生徒を巻き込んでいる」と称し、次の処分が充分予想される中で、河村・深沢先生は職場に復帰する事ができました。これも、この間の多くの皆様方の支援によるものと考えております。

今後、鈴木先生を一日でも早く職場に取り戻すために、尚一層皆様方のご支援をいただかねばならないと考えております。

二月六日には市芦救援会第一回総会を開催致します。市当局による全体的な組合弾圧をはねかえし、教育の管理統制化を許さず、市芦教育を支えて三先生の処分撤回を勝ち取るために、市芦救援会活動の財政、組織的体制の早期確立が必要です。一人でも多くの会員を結集して総会を成功させるべくご協力をお願い致します。



11.1 第1回総会準備会会場全景

救援会第二回總會準備会成功裡に終わる

一月一日、二人の先生の職場復帰を勝ち取り、今後の救援会活動を組織的に進めるための準備会を開きました。

市声救援会の会長をおたのみしている玉本 格先生からは、「戦前子供に間違った教育を押し付けた戦争犯罪者の一人として、戦後の民主主義を再出発として取り組んできましたが、また同じような状態になりつつある。この闘いは天下分け目の闘いであり、六八才になるが一生懸命頑張りたい」と大変力強い挨拶をいただきました。

同じく救援会の副会長をおたのみしています玉田勝郎先生からは、「救援会活動は、三先生の処分撤回を勝ち取ると共に、市声が続けて来られた教育を支えるという任務を持っている。県教育行政の生徒切り捨て教育に屈せずにしたのが市声教育であり、今日の教育を憂える人々の志を結集して救援会活動を盛りあげていきたい」と挨拶がありました。

また、この闘いを全面的に支援しその輪を他市・他府県に広めていくとして「市声反弾闘争を支援する会」が県下の教師を中心に結成されるということで、その事務局の方からも熱い連帯の挨拶をいただきました。その略称「支援する会」と合同で『だれかがどこかでいつも闘っている』というパンフが当日発行されました。この間の闘い・集会の記録を収録したものです。この闘いを広めていく資料として市声救援会で四〇〇円で頒布しておりますので、是非ともお買い求め下さい。

子供に加勢して、見習って闘っていくかねぼん

保護者 山崎 薫

飛び入りでございまして、今日のプランには無いので大変失礼致しますけれども、この一〇月四日の夕方に電話がかかってまいりました。「学校の問題を知っておられるか、その事で話をしてほしいので市民会館に集まって貰いたい」という事でした。私もつうすは知っておりましたので行ってみました。育友会においてこの問題についての見解をまとめた、という事だったんですけれども、その場には育友会の人だけで、学校の先生はおられず、教育委員会の方もおられず、生徒の方もおられなかった。こんな風な状態で育友会父兄の思い、考えをまとめようと言ったことは、これは単なるグチになってしまつてはなにかということ、私は強く、その場で考えを決定することに反対しましたが、その結果、近々に教育委員会の方も集まって貰って、話をしてもらって、それを聞いてもらって父兄の考えを出す、こういう話で終わった。

それでも二、三週間は終わっているはずで、その集会の電話すらない。こういうことであつたんですが、その電話も何もなくて、先日「申し入れ書」と書いた印刷物が入ってきたんですね。あれは、私なんかの父兄の一人としての意見では全くないのであります。あんな考えを持っていない。「生徒を巻き込まないでください」と。

また、弁護団の分銅先生からは、今日の教育現場における管理統制の強化の実態、三先生の公平委員会に於ける闘いで市教委の市声つぶしの目論みを暴露し、処分の不当性を明らかにしていく事の重要性、必要性が話されました。おそらく来年初めには市教委を引き出させての公開審理が始まるということで、傍聴への組織的取り組みをおこなって行く事が確認されました。

卒業生の涙の訴えに、たまらず保護者の方が飛び入り挨拶

その後、卒業生・保護者の方から熱い連帯の挨拶を戴きました。とくに保護者の方の話は、一九回卒業生野崎香津代さんの話が終わって司会が閉会宣言をしているなかで、突然マイクを持たれて「生徒の闘いを見習わなくてはならない」と話されたもので、卒業生が涙ながらに「市声つぶしを許さない」と訴えた姿にたまらず前に出てこれたものです。一気に集会の空気がヒーンと引き締まりました。闘いの中での人と人の出会いは、予定された枠を遥かに越えて、かくのごとく激しくかつ優しい、情念の噴出ともいえるべき中でこそ、その絆を確かめ合っているものだとこのことを感じ取れた集会になったと思います。

私は親の立場として、こんな事を考えたのです。まあ、この闘争をやってみても、どうせ上からの強い力に勝つはずはないと、大人は、そんな風に考えてしまうのですけど、生徒たちはそんな事を考えなくて、この学校の、この教育方針を、いま野崎さんがおっしゃいました様に、自分の身に、身にしみて感じてきて「こんな良い学校はない」と、そういうところから署名運動やら、いろいろとそういう学生活動が出た。その時に、親として感じて、こんな事は勝つはずがない、もっほっとこうとおもつ……こりゃ、もう恥ずかしい。どうもしようがない。

私はどうしても、これには親としては、子供に加勢して、見習って闘っていくかねぼんではないとおもつのであります（拍手）
世間は色めがねで見ているからということもあります。確かにそれはその通りでありますけれども、それじゃあ、その色めがねで見たり、見ている人から、色めがねをどうしてまっすぐに見えるような、教育方針にすることはないんですか。その色めがねの補色に成ることはないんです。その色めがねを掛けない人を、これから長い事かかるかもしれないませんが、地面をはいずりまわってしなければならぬかもしれないかもしれませんが、色めがねを掛けたい人を集めようじゃないですか。（拍手）

突然こういう事を割り込んで言いました、ご迷惑を掛けましたけれど、学生さん方の、この心ですね、私たち大人は見習わないといかん。こういう風にひとつ頑張らないかんと思いたいで、前に立たせて戴きました。どうも有難うございました。

卒業生、保護者の独自の運動の組織化を

集会を一日閉じた後、卒業生と保護者の方々だけで、今後の活動についてそれぞれ協議しました。卒業生の野崎さんの御両親も来られて、活発な意見を出して戴きました。一方で、市庁の教師や生徒に対する悪質なデマが多いとか、来年は市教委や管理職が障害児の入学を許可しないのではないかということが充分予想される中で、保護者の中でも障害児の受け入れについて若干の意見の相違も見られましたが、すくなくともこの間の育友会の一部幹部の動きは、市教委・管理職の一方的な情報を流し「市声つぶし」に手をかしているものではないということへの批判はかなり出て、市庁教育を支える親の会のようなものを作っていかうという声も出ていました。

今後、保護者の方々にそういう事での連絡が入るかと思いますが、保護者の方々による独自の活動について積極的にすすめていただければと思います。

◆編集後記◆

先日、山崎さんと話をしました。片方の目が網膜剥離で失明状態、もう片方の目も強度の近眼という大変きつい状態の中におられるのに、私達が出しているピラ、パンフを「二行読んで目を休めまた」行と読んでいます」とおっしゃっていました。また、「子供たちはいまいろんなことで切られています、学校で子供が切り捨てられたら、しんどいところにいる子供は一体どうすればいいんですか」ともおっしゃっていました。分厚いレインズの奥にキラリと光る目がとても印象的でした。

市声救援会への入会、年末カンパのお願い

河村・深沢・鈴木三先生が若屋市公平委員会に処分の不服申し立てを行いました。今後長期的な闘いをすすめるにあたって弁護士費用、資料作成費用、市声救援会機関紙作成・発送費などかなりの費用が必要になってきますので、市声救援会会員を増やしていくことが急務になっております。よろしく協力下さい。また、この年末に向けて、会員の皆さんをはじめ、多くの皆さんにカンパをお願い申し上げます。同封の郵便局払込み用紙をご利用していただければ幸いです。

二月六日に市声救援会第一回総会を開催致しますので、出来ましたらそれまでに入会手続きをお願い致します。

闘争記録集の頒布について

この間の闘いの事実経過、集会の記録をまとめた冊子を出版しましたので、是非お買い求め下さい。

『だれかが どこかで いつも闘っている』 四〇〇円

「全記録 一〇・二〇」

三人の先生を守れ 反弾圧抗議集会 一〇〇円

市声救援会第一回総会のご案内

日時：二月六日(土) 午後八時三〇分

場所：若屋市民センター 四〇一号室